

親子のボディコンタクトや遊びが 園児の友達づくりに及ぼす影響について

蒲 真理子* , 宮下 恭子**

A Study on How Play and Body-contact Between Parents and
Child Influence a Child's Friend-making in Preschool

Mariko Kaba* , Kyoko Miyashita**

Received October 31, 2002

はじめに

乳幼児期における親子間のボディコンタクトや遊びは、人間が成長していく過程において重要な行為であると誰もが認識している。とりわけ母と子のボディコンタクトは、身体的接触から得られる心理的な側面、すなわち情緒の安定や円満な人間関係の形成などに深く関与する行為⁽¹⁾である。また、乳幼児の遊びにおける価値や意義については「遊びが幼児の重要な生活部分を占めている以上、子どもの発達において演ずるその役割の重要性は、いくら強調しても強調しすぎることはない」⁽²⁾といわれるように多くの研究によって言及されている。筆者らも同様にその重要性に着目し、子育ての原点でもある親子間のボディコンタクトを幼児の心身の健全な発達のために不可欠な行為としてとらえ、親子間のボディコンタクトと家庭における遊びとの関連について、特に子どもの遊びに重点をおいて調査研究を進めている。

子どもは成長するにつれて他人と遊ぶ機会が増え人間関係や社会性を身につけていくが、子どもの人間関係、中でも友だちづくりの過程において身体接触を伴う関わりはコミュニケーションの基本であると考えられる。それは言葉による表現が未熟な乳幼児にとって、身体による表現は自分の意思や感情を相手に表現したり伝えたりする有効な手段であるので、ボディコンタクトは直接自分自身を受け止めてもらうためには効果的な方法である。そしてこの表現方法は子どもが生育する家庭において親がボディコンタクトに対してどのような意識をもって子育てをし、親子間でどのようなボディコンタクト経験を積み上げてきたかという親の意識や養育態度によって影響を受けると筆者らは考える。

親の養育態度が子どもの性格特性や行動に大きな影響を及ぼすという点について、野崎は「母親が幼児に対して関心がうすかったり、放っておく時、幼児の情緒、自制心、依存的、家庭不適応の性格特性に問題がみられる。」⁽³⁾と指摘している。また、新村は「子どもの成長にとっては拒否的な態度ではなく親の受容的な態度が望ましい態度であり、親が子どもを受容し、

* 薬学部
Faculty of Pharmaceutical Sciences

** 東京成徳短期大学
Tokyo Seitoku College

励ましていくときに、正しい愛情と人間関係の理解が成り立つ⁽⁴⁾と述べている。そこで筆者らは親の受容的態度の典型であるボディコンタクトに注目し、子どもが親から受けるボディコンタクトの豊かさや子どもが求めるボディコンタクトに対する親の受容的な態度の寛容さなどが、幼児が他人とかかわり合う力を育てると考えた。更に、筆者らの先行研究⁽⁵⁾において幼児期にボディコンタクトを伴う遊びを経験した女子学生は、幼児期のこの経験について社交、友情、協力、協調などの意義を見出していた結果より、ボディコンタクトを人間関係形成のためのコミュニケーション機能の一つとして捉えることにした。

幼稚園児が家庭にいるときの親子間のボディコンタクトや、それに対する親の意識、家庭におけるボディコンタクトを伴う遊びを中心に、子どもの遊びの実態について調査⁽⁶⁾し、年齢児別や性別による集計、親の子に対するボディコンタクトの対応の違いなどから分析をすでに行っている。その結果、幼児期における親子間のボディコンタクトは年齢や性別に関わりなく意義ある行為であることが明らかになった。又、家庭におけるボディコンタクトを伴う遊びでは、「かごめ、かごめ」のような手をつなぎ合う遊び、「すもう」のようなからだが接触し合う遊びなどはほとんどされていないことが判明した。

以上のような先行研究に基づき、本研究では、家庭において親から受けるボディコンタクトの豊かさや親のボディコンタクトに対する意識の高さ、子ども同士のおそびの中でのボディコンタクトなどが、他人とのかかわりの典型である友達づくりを巧みにしているとの仮説を立て、家庭における親子間のボディコンタクトや子どもの遊びが幼稚園での友達とのかかわり、すなわち幼児期の友達づくりに及ぼす影響について検証することにした。

なお、ボディコンタクト (body contact) という語は、触れる (touching)、愛撫する (handling)、抱きしめる (holding) などのように表現されている皮膚の触覚機能と密接に関係のある経験の総称として用いられている⁽⁷⁾。通常このような行為はスキンシップ (skinship) という言葉で表現されることが多いが、これは和製英語として誕生し、未だ研究用語として定着していないので、平井らの研究⁽⁸⁾を参考に筆者らの一連の研究においてボディコンタクト (body contact) という言葉を使用することにした。

方 法

1. 調査対象

石川県金沢市の私立幼稚園 2 園の園児488名 (女児234名, 男児254名) と対象とした園児の親488名

内訳: 年少児156名, 年中児167名, 年長児165名

2. 調査期日

2001年7月上旬

3. 調査の方法と内容

(1) 友達とのかかわりについて: 友達を作るのが上手であるか否かについて、園児の家庭への調査用紙とは別に担任に日常の観察から園児を判定してもらった。「友達を作るのが上手である」項目に「はい、普通、いいえ」で記入してもらった。

(2) 家庭におけるボディコンタクトと子どもの遊びに関する調査: 保護者に対して、次の調査内容について、選択および数値記入、自由記述による回答を求めたアンケートを実施した。

なお、ボディコンタクトに関する質問項目において使用した言葉は「ボディコンタクト」よりも一般的に認知度が高く、理解されやすい「スキンシップ」という言葉を使用した。

〔調査項目〕

子（園児）のプロフィール（年齢、性別、家族数、兄弟の有無）

子の生活習慣について（起床・就寝時間、食事、おやつ、排便、体力、遊び傾向）

親のボディコンタクトに関する意識について

親が子に対して行うボディコンタクトに関する項目（母から子へ、父から子へ）

子が親に求めるボディコンタクトに関する項目（子から母へ、子から父へ）

家庭での遊びについて（遊びの種類と経験、遊び相手、遊び人数、友達のできやすさ、遊び場所、遊びの志向性、習い事）

4. 分析方法：質問紙調査の結果を各項目について単純集計を行い、必要な項目についてクロス集計、 χ^2 検定をおこなった。

調査内容についての全回答は対象者の年齢や男女についての差異を考慮して、各年齢の男女ごとに集計（以下、各年齢の男女別）、年齢ごとの集計（以下、年齢別とする）、全対象の男女ごとに集計（以下、男女別とする）、全対象を一括して集計（以下、全体とする）した。その結果、ほとんどの調査項目において各年齢の男女別や年齢別、男女別には同様の傾向が見られ有意差（ χ^2 検定）は認められなかったため、全対象を一括して本研究では扱う。

調査内容（1）の「友達を作るのが上手である」（以下「友達づくり」とする）について、担任が「はい」と回答した子を得意群、「普通」と回答した子を普通群、「いいえ」と回答した子を不得意群とした結果、得意群81名、普通群377名、不得意群30名となり、各グループ別に調査内容（2）の家庭におけるボディコンタクトと子どもの遊びに関する項目を集計し3グループ間の比較検討を行った。

結果と考察

1. 友達づくりと家庭におけるボディコンタクトとの関連について

（1）親のボディコンタクトに関する意識

家族と子どもの肌の触れ合い（ボディコンタクト）について、「とても大切」を始めとする5選択肢（図中に掲載）の中から該当する回答を求めた結果を、友達づくりとの関連で示したのが図1である。

「とても大切」と回答した親は得意群（91.4%）、普通群（89.7%）、不得意群（96.7%）であることから、3群の親は一樣に家族と子どものボディコンタクトについてとても大切と意識しており、得意群、普通群、不得意群の親に有意な差は認められなかった。

（2）ボディコンタクトが必要な年齢について

子どもとのボディコンタクトが必要な年齢について「1歳まで」を始めとする9選択肢（図中に掲載）の中から該当する回答を求めた結果を、友達づくりとの関連で示したのが図2である。

子どもとのボディコンタクトが必要な年齢については3群とも親の意識に有意な差は認められず、「小学校低学年まで」と「小学校高学年まで」を合わせると得意群（60.0%）、普通群（65.4%）、不得意群（60.0%）とも約60%の親は子どもが小学生の間は必要と思っているよう

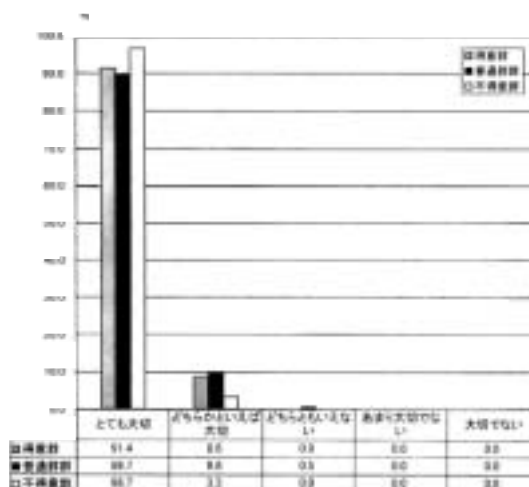


図1 友達づくりの得意・不得意別から見た親のボディコンタクトに対する意識

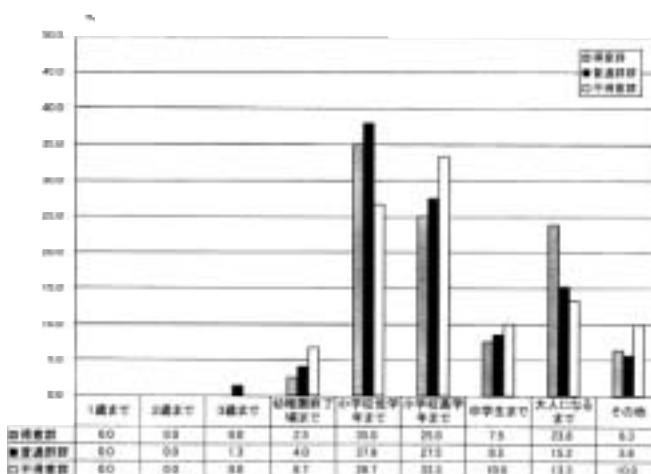


図2 友達づくりの得意・不得意別から見た親がボディコンタクトを必要だと思う時期

である。また「大人になるまで必要」と思っている親は、得意群（23.8%）に多く、普通群（15.2%）、不得意群（13.3%）にそれぞれ10%以上いた。

（3）親子間のボディコンタクトについて

1）親が子どもによくするボディコンタクトについて

親が子どもによくするボディコンタクトについて、「頭をなでる」を始めとする12選択肢（表中に記載）の中から該当する回答を複数求めた結果を、友達づくりとの関連で示したのが表1である。

母親では「頭をなでる」「手を握る」「だっこする」「からだを抱きしめる」「ひざにのせる」「頬や額（顔）にキスをする」が、50%以上の母親がよくする行為であり、特に「手を握る」行為は、3群の母親の70%以上が最も幼児にするボディコンタクトであった。「ひざにのせる」

表1 友達づくりの得意・不得意別に見た親子が子どもによくするボディコンタクト (複数回答)

友達づくり	得意群% (N=81)			普通群% (N=377)			不得意群% (N=30)			2群間 ^注		
	母	父	χ^2 検定	母	父	χ^2 検定	母	父	χ^2 検定	χ^2 検定(母)	χ^2 検定(父)	
	頭をなでる	61.7	51.9	1.2688	70.9	59.0	3.4301 *	63.3	63.3	0.0000	-0.1548	-1.0797
ほおや顔をなでる	43.2	25.9	2.3128	45.2	23.3	9.3608 *	56.7	26.7	2.3568	-1.2618	-0.0789	
手をにぎる	74.1	39.5	4.4409 *	76.2	38.9	10.3749 *	83.3	36.7	6.2526 *	-1.0229	3.7029	
肩や背中をなでる(からだをさする)	25.9	16.0	1.5435	33.6	18.3	4.8136 *	30.0	16.7	1.2209	-0.4292	-0.0784	
ほほやひたい(顔)にキスをする	50.6	28.4	2.8929	55.6	26.5	8.1340 *	56.7	43.3	1.0328	-0.5667	-1.4931	
だっこする	65.4	56.8	1.1282	63.2	54.5	2.4390	63.3	50.0	1.0421	0.2057	0.6385	
おんぶする	30.9	21.0	1.4343	32.5	19.6	4.0599 *	30.0	20.0	0.8944	0.0877	0.1140	
肩ぐるまする	1.2	45.7	-6.6751 *	1.9	37.6	-12.3426 *	3.3	33.3	-3.0028	-0.7382	1.1691	
からだをだきしめる	65.4	23.5	5.3759 *	66.9	27.0	11.0048 *	60.0	26.7	2.6053	0.5294	-0.3501	
ひざにのせる	69.1	66.7	0.3366	69.6	61.6	2.2970	56.7	50.0	0.5175	1.2296	1.6079	
子どもをからだで支えるあそびをする	16.0	42.0	-3.6356 *	18.0	51.1	-9.5620 *	26.7	43.3	-1.3533	-1.2684	-0.1286	
その他	1.2	2.5	-0.5828	6.1	7.4	-0.7250	0.0	3.3	-1.0084	0.6113	-0.2493	

表2 友達づくりの得意・不得意別に見た子どもが親に求めるボディコンタクト (複数回答)

友達づくり	得意群% (N=81)			普通群% (N=377)			不得意群% (N=30)			2群間 ^注		
	母	父	χ^2 検定	母	父	χ^2 検定	母	父	χ^2 検定	χ^2 検定(母)	χ^2 検定(父)	
	からだにくっついてくる	76.5	54.3	2.9736	76.5	54.3	8.3770 *	76.7	46.7	2.3898	-0.0136	0.7170
ひざの上ののっけてくる	79.0	71.6	1.0932	77.2	71.6	5.0958 *	56.7	50.0	0.5175	2.3543	2.1304	
手をつなぎにくる	60.5	35.8	3.1449	64.6	35.8	8.2198 *	70.0	30.0	3.0984	-0.9216	0.5722	
肩や背中(からだ)を撫でたりさわりにくる	39.5	29.6	1.3216	36.0	29.6	4.1636 *	33.3	23.3	0.8595	0.5955	0.6566	
頬や顔(顔)にキスにくる	39.5	13.6	3.7365 *	31.5	13.6	6.2245 *	16.7	16.7	0.0000	2.2669	-0.4111	
「だっこして」という	69.1	54.3	1.9397	67.7	54.3	5.0234 *	60.0	33.3	2.0702	0.9068	1.9647	
「おんぶして」という	39.5	29.6	1.3216	35.4	29.6	3.1698	30.0	30.0	0.0000	0.9216	-0.0379	
「肩ぐるまして」という	1.2	40.7	-6.1739 *	2.6	40.7	-10.7937 *	6.7	33.3	-2.5820	-1.5673	0.7114	
抱きついてくる	61.7	32.1	3.7784 *	56.6	32.1	5.4674 *	56.7	43.3	1.0328	0.4842	-1.1011	
からだを支えるあそびをして欲しいという	22.2	56.8	-4.5000 *	22.5	56.8	-10.0082 *	26.7	56.7	-2.3568	-0.4910	0.0117	
その他	2.5	3.7	-0.4543	5.8	3.7	0.3176	3.3	13.3	-1.4013	-0.2493	-1.8536	

* P < 0.05 注) 2群とは得意群と不得意群 母60%以上, 父50%以上

行為は、得意群（69.1%）、普通群（69.6%）に比べて不得意群（56.7%）がやや少ないが、一方、母親が行うものとしては比較的少ない行為であるが「子どもをからだで支える遊び」は、不得意群がやや多い傾向がみられた。但し、全ての行為について3群間には有意な差は認められなかった。

父親に関しても3群とも有意な差は認められず、「頭をなでる」、「だっこする」、「ひざにのせる」が、50%以上の父親がよくする行為であった。しかし父親は母親に比べて全般的に子どもとのボディコンタクトをする割合は低い。また、「ひざにのせる」行為は、母親と同じく得意群（66.7%）、普通群（61.6%）に比べて不得意群（50.0%）は少く、「頬や額（顔）にキスをする」は、不得意群（43.3%）に多い傾向がみられた。これも母親同様有意差は認められなかった。

これらから、3群とも親が子どもによくするボディコンタクトに違いは認められず、友達づくりの得意、不得意とは関連があるとはいえなかった。

2) 子どもが親に求めるボディコンタクト

子どもが親に求めるボディコンタクトについて、「からだにくっついてくる」を始めとする11選択肢（表中に掲載）の中から該当する回答を複数求めた結果を、友達づくりとの関連で示したのが表2である。

母親に求めるボディコンタクトは3群間には有意な差は認められず、「からだにくっついてくる」「ひざの上ののってくる」「手をつなぎにくる」「だっこしてという」「抱きついてくる」が、約60%以上の幼児が求める行為である。特に、「ひざの上ののってくる」行為は、得意群（79.0%）、普通群（77.2%）は最も多い行為であるのに対し、不得意群（56.7%）はやや少ない傾向がみられたが有意差は認められなかった。父親に関しても、3群とも有意な差は認められず、「からだにくっついてくる」「ひざの上ののってくる」「からだを支える遊び」「だっこしてという」が、不得意群の「だっこしてという」（33.3%）を除いて約40%以上の幼児が求める行為である。但し、3群とも父親に対しては「からだを支える遊び」と「肩ぐるまして」以外は、全般的にボディコンタクトを求める割合は母親より低い。父親に求めるボディコンタクトの中で、特に得意群、普通群は「ひざの上ののってくる」「だっこしてという」行為が不得意群に比べて多く、不得意群は「からだを支える遊び」が得意群、普通群に比べて多い傾向がみられたが有意差は認められなかった。

これらから、子どもが親に求めるボディコンタクトにも違いが認められず、友達づくりの得意、不得意とは関連があるとはいえなかった。

(4) 子どものボディコンタクト要求に対する親の対応

子どもが親にボディコンタクトを求めた時、親の対応の仕方について、「ほとんど応じる」を始めとする4選択肢（図中に掲載）の中から該当する回答を求めた結果を、友達づくりとの関連で示したのが図3である。

「ほとんど応じる」母親は、不得意群（80%）が、得意群（63.2%）普通群（62.0%）に比べて多い傾向がみられたが有意差は認められなかった。一方、父親も「ほとんど応じる」父親が3群とも60%程度と同傾向であった。したがって、子どものボディコンタクト要求に対する親の対応の違いと友達づくりの得意、不得意とは関連が認められなかった。

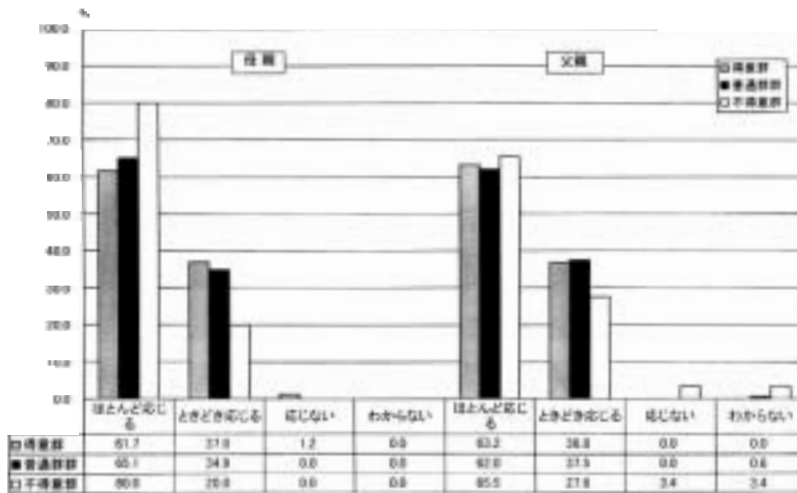


図3 友達づくりの得意・不得意別に見た子どものボディコンタクト要求に対する父母の対応

(5) 外出時の手つなぎ

子どもが親と外出する際に手をつなぐかどうかについて、「たいていつなぐ」を始めとする4選択肢(図中に掲載)の中から該当する回答を求めた結果を、友達づくりとの関連で示したのが図4である。

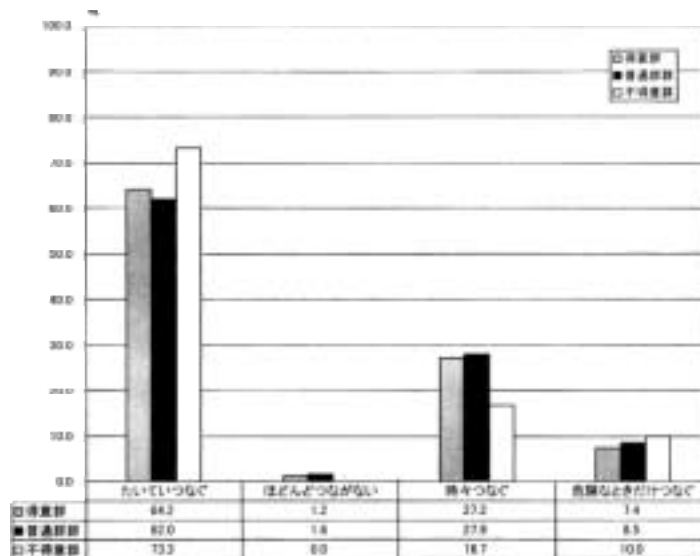


図4 友達づくりの得意・不得意別から見た外出時における親子の手つなぎの状況

3群とも60%以上の親が「たいていつなぐ」と回答しているが、中でも不得意群の親の方が多く、一方、「時々つなぐ」親は得意群、普通群の方にやや多く、また僅かであるが、「危険な

ときだけつなぐ」という親は不得意群に多い傾向がみられたが有意差は認められなかった。したがって、外出時の手つなぎに対する親の対応の違いと友達づくりの得意、不得意とも関連が認められなかった。

以上の結果から考察すると、本研究は家庭において親から受けるボディコンタクトの豊かさや親のボディコンタクトに対する意識の高さ、子ども同士のあそびの中でのボディコンタクトなどが、他人とのかわりの典型である友達づくりを巧みにしていると考えて研究に取り組んだが、本研究では不得意群の標本数が少ないことも影響していると考えられる為、園における友達づくりの得意、不得意と本調査内容における家庭での親子間のボディコンタクトの内容やかかわり方とは関連が認められなかった。幼児が幼稚園で友達を作る行為は、家族という血縁関係をはなれて他人である子ども同士で人間関係を作りあげていく社会的な修業の初歩であるといわれている。このような人とのかわりをもつ行為の基礎は、まず家庭における親、特に乳幼児期に母親から受ける身体接触行動であり、とりわけ母親とのかわりの中で育つといわれている。母親と子どものかかわりについての研究で有名なボウルビィ (Bowlby, J.)⁽⁹⁾ は、乳幼児期の母と子の関係を「愛着行動 (アタッチメント)」と表現しており、3歳までの「愛着行動 (アタッチメント)」が満足なものであれば、すなわち愛情が成立していればその後の母親との関係においても、「もはや密接な身体的接触の必要はなくなり、軽い接触が思いやりのある視線で十分になる、しかしそのためには、3歳までの『愛着行動』が、子どもにとって満足すべきものであったかどうか非常に重要なことである」と述べている。したがって、本研究で調査した幼児は3歳以降であったため、家庭におけるボディコンタクトの内容やかかわり方が親との関係を左右しているとは言えず、むしろ親との愛情関係が幼児期までに成立しているかどうか重要であったと考えられる。したがって、友達づくりの得意、不得意と3歳以降の親子間におけるボディコンタクトの内容やかかわり方は問題ではないと考えた方が妥当である。むしろ他の要因が関係していると考えられるので、次ぎに家庭における幼児の遊びに着目して研究を進める。

2. 園での友達づくりの得意・不得意と家庭における子どもの遊びとの関連について

(1) よくする遊び

家庭における遊びの種類について、ボール遊びを始めとする20種類の遊び(図中に掲載)について「よくする」と回答したものだけをまとめて、友達づくりとの関連で示したのが図5である。屋内の遊びでは、3群とも「室内でテレビ、ビデオをみること」「お絵描き」「本、絵本やまんがなどを読む」「ブロックやおもちゃ(ミニカーなど)」「ものを作ってあそぶ(粘土、折り紙など)」でよく遊んでいた。その中で「本、絵本やまんがなどを読む」「ブロックやおもちゃ(ミニカーなど)」、全般的に多くはないが「ゲーム(テレビ・パソコン、ゲームボーイなど)」等、友達がいなくても1人でできる個人的な遊びは、不得意群の幼児が得意群に比べてよく遊んでいる傾向がみられた。一方、屋外では、3群とも「公園での固定遊具(ブランコ、すべり台など)」や「自転車(三輪車含む)」でよく遊んでいるが、屋外遊びでも得意群は「ボール遊び」や「なわとび」など仲間と遊ぶと楽しい遊びを比較的多くしている傾向がみられたが、不得意群は「公園での固定遊具(ブランコ、すべり台など)」「砂遊び」など1人で遊べる遊びをよくしていた。ただし有意差は認められない。室外も室内と同様に、3群とも集団で遊

ばなくては遊べないようなものより、むしろ個人的な遊びがよく遊ばれている。

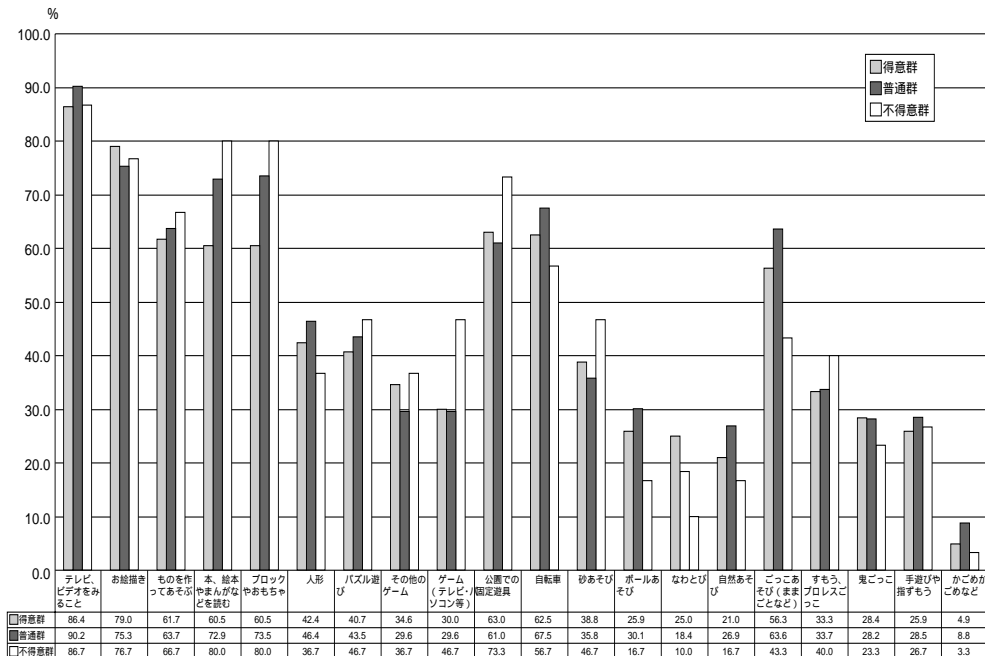


図5 友達づくりの得意・不得意別に見た家庭でよくする遊びの内容

次に、仲間との遊びや自分以外の人とからだを触れ合う遊びをみると、ごっこ遊び(ままごと、お母さんごっこ、幼稚園ごっこ等)は不得意群に比べて、得意群、普通群の幼児が比較的多く遊んでいた。ただし有意差は認められない。また、「すもう、プロレスごっこ」「鬼ごっこ」「手遊びや指ずもう」など他人とからだを触れ合う遊びは、よく遊ぶと回答した幼児は3群とも30%程度と少なかった。幼児期の遊びは、子どもの発達においてその重要性は、いくら強調しても強調しすぎることはないといわれるぐらい意義のあるものであるが、近年、その遊びの内容は、外遊びにおいても「鬼ごっこ」や「かごめかごめ」などの集団遊びやボール遊び、「自然遊び(虫取り、花摘み)」などの遊びより、むしろ「公園での固定遊具(ブランコ、すべり台など)」や「自転車(三輪車含む)」などの個人遊びが好まれ、更に外遊びより「テレビ、ビデオ鑑賞」「ゲーム」「絵本やお絵描き」などの室内での個人遊びの方が好まれるようになって久しい。⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾⁽¹²⁾ 本調査でも3群とも同様な結果であった。「鬼ごっこやかくれんぼのような集団遊びの多い運動遊びでは、社会的スキルを獲得する貴重な場にもなっている」⁽¹³⁾といわれているが、これらに類する遊びは本調査でも、3群ともあまりされていない。すなわち、このようなルールを守ったり、譲り合ったり、協力したりしなければならない、人とのかわりを育てる遊びそのものが減少している。したがって、本調査においても、ボール遊び、鬼ごっこ、すもう・プロレス、手遊びや指ずもう、かごめかごめ、ごっこ遊び(ままごと、お母さんごっこ、幼稚園ごっこ)などの社会性を育てると筆者らが意図した遊びは3群とも非常に少なく、わずかにボール遊び、鬼ごっこ、ごっこ遊びに得意群の方が不得意群に比

べて多い傾向はみられた。但し有意な差は認められなかった。以上のことから、友達づくりの得意・不得意と今回調査した家庭における子どもの遊びとは関連は認められなかった。したがって、本調査では園での友達たちづくりの得意な子は不得意な子に比較して「ごっこ遊び」や運動遊び、集団遊びなどの遊び経験が家庭において豊富であるということはいえない。

(2) 家庭でよく遊ぶ相手

家庭にいるときよく遊ぶ相手について、「年上の友達」を始めとする6選択肢（図中に掲載）の中から該当する回答を求めた結果を、友達づくりとの関連で示したのが図6である。3群とも遊ぶ相手は兄弟姉妹が最も多く、次いで身近な大人、同年齢の順であり、家庭でよく遊ぶ相手に有意な差は認められなかった。20年前の報告（1983）⁽¹⁴⁾に「現代の子ども達は、きょうだい数も少ないので、異年齢の友達とのかかわりを通して、年上の子どもから遊びのルールなどを教えられたり、年下の子どもに遊びを教えながら、異なった年齢集団との人間関係を育てていくことが必要と思われる」と記されているように、異年齢との交流は友達づくりに重要な要素であると思われるが、本調査では3群とも異年齢との交流程度は非常に少ない状況である。同年齢との交流においては得意群や普通群が、不得意群に比べてやや多く、一方、遊ぶ相手がいなく「ひとり」というのが不得意群にやや多い傾向がみられたが有意差は認められない。

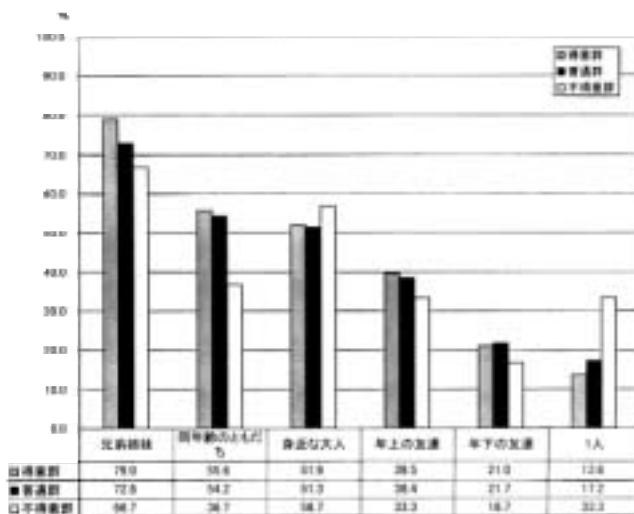


図6 友達づくりの得意・不得意別から見た家庭でよく遊ぶ相手

(3) よく遊ぶ友達の人数

家庭にいるときよく遊ぶ友達の人数について、「1人」を始めとする6選択肢（図中に掲載）の中から該当する回答を求めた結果を、友達づくりとの関連で示したのが図7である。不得意群は、得意群、普通群に比べて友達の数は少なく、4～5人以上の友達を持っている子は得意群、普通群に比べて圧倒的に少なかった。得意群、普通群は園以外でも遊ぶ相手があり、集団で遊ぶ機会があるのに対し、不得意群は1人または全く遊ぶ相手がいない子も多く、家庭における交友関係は乏しく、1人ないしは大人としか遊ぶ相手がいない子が多かった（ $P < 0.01$ ）。前項との関連で考察すると、不得意群は、きょうだいと遊ぶか、身近な大人以外に、家庭にお

ける友達がほとんどいない子が多いとみられる。

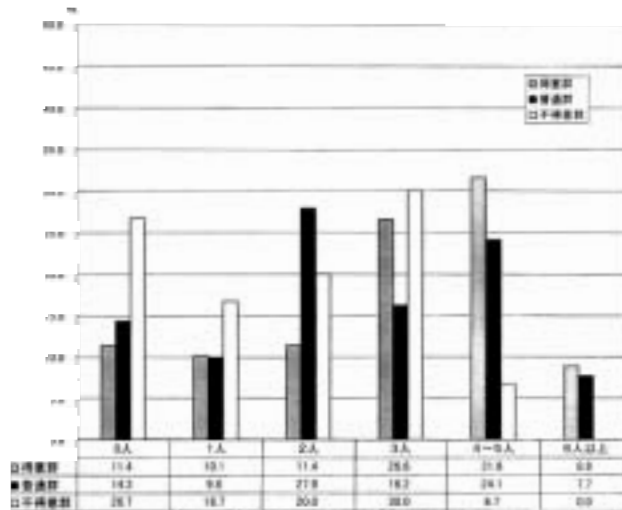


図7 友達づくりの得意・不得意別から見たよく遊ぶ友達の人数

(4) 友達のできやすさ

友達のできやすさについて、「人見知りするほうである」を始めとする5選択肢（図中に掲載）の中から該当する回答を求めた結果を、友達づくりとの関連で示したのが図8である。不得意群は、得意群、普通群に比べて誰とでもすぐ友達になる子は少なく、人見知りをしたり、友達になるまでに時間がかかる子が有意に多かった（ $P < 0.05$ ）。親もわが子の友達とのかかわり方に時間がかかることを認識していることがわかる。

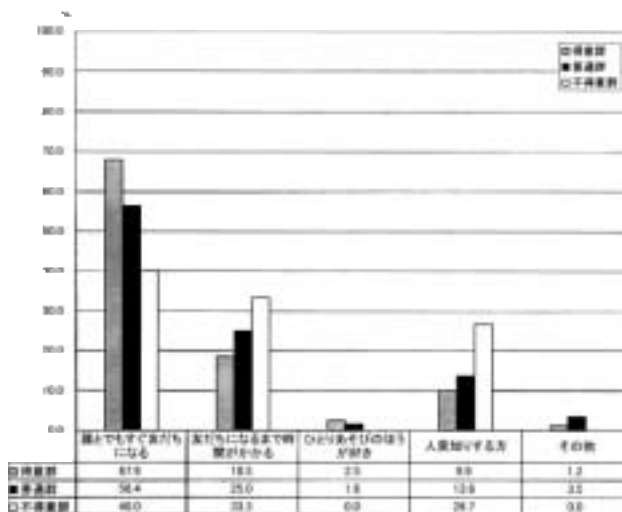


図8 友達づくりの得意・不得意別から見た友達のできやすさ

(5) 遊び場

家庭での遊び場所について、「自宅」を始めとする12選択肢（図中に掲載）の中から該当する回答を複数求めた結果を、友達づくりとの関連で示したのが図9である。3群とも屋内では自宅と友達の家、屋外では公園と自宅周辺で多くの幼児が遊んでいる傾向がみられた。遊び場所で3群間に有意な差が認められたのは友達の家であり、得意群、普通群に比べて、不得意群は友達の家で遊ぶ幼児が有意に少なかった（ $P < 0.05$ ）。遊び場としての友達の家について「『友達の家』という私的な場所は、特定の子ども達同士に『遊び場』として開放されていて、不特定多数の子ども達に開かれている場所ではない。しかし、それは子ども同士が知りあい、友人になってはじめて、人と人とのつながりにおいて『遊びに行く』という意味が成立して、『友達の家』という『自分の家』から出た、未知の空間が『遊び場』として開拓される。」⁽¹⁵⁾と述べられているように、近所遊びが減少した現在、幼児の遊び相手は、子ども同士のつながりより親同士の関係によって遊び相手が規定されるなど親の生活状況が規定要因としてはたらくといわれている⁽¹⁶⁾が、同年齢の遊び相手がいる他人の家に遊びに行く行為は友達づくりに大きく関わっていると考えられる。

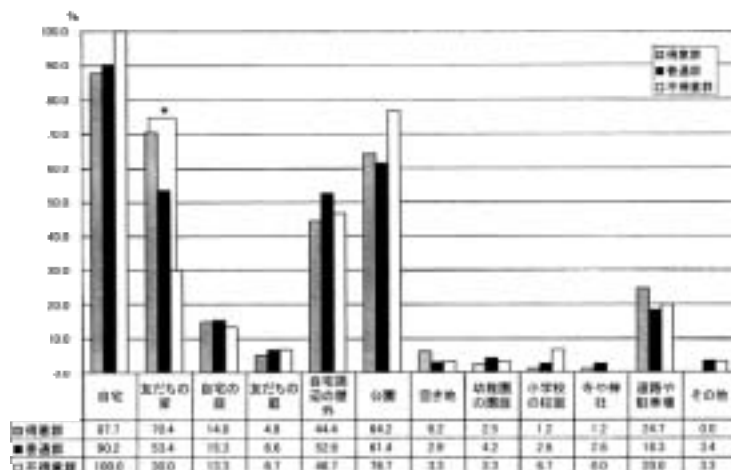


図9 友達づくりの得意・不得意別から見た家庭でよく遊ぶ場所

(6) 外遊びと室内遊びの志向性

外遊びと室内遊びのどちらを好むかについて、「外遊び」を始めとする3選択肢（図中に掲載）の中から該当する回答を求めた結果を、友達づくりとの関連で示したのが図10である。3群とも有意差は認められず、室外と室内を半々くらい好む幼児が50%程度と最も多く、次いで外遊びであった。

以上の結果から、家庭における遊びが園での友達づくりの得意、不得意にどのようにかわっているかをまとめてみると、本調査において明らかに関連が認められた項目は、よく遊ぶ友達の人数、遊ぶ場所、友達のできやすさの3項目であった。すなわち、友達づくりの得意な幼児は、家庭でよく遊ぶ相手がきょうだいや友達など3～5人いる子が多いのに対し、不得意な幼児は3人以下と少なく、全くいない子も他群に比較して多い。また、遊び場所では、友達の

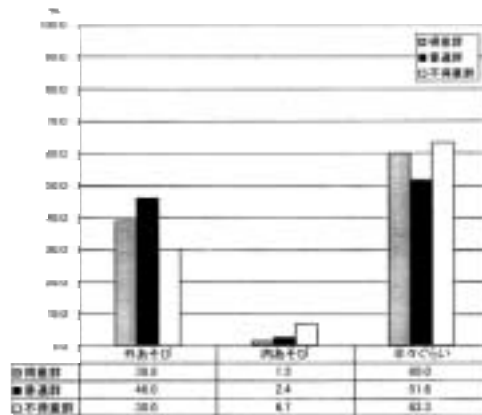


図10 友達づくりの得意・不得意別から見た外遊びと室内遊びの志向性

家で遊ぶ子が不得意群の幼児に比較して得意群に多い。友達ができやすいか否かの調査では、得意群の幼児は、親の目からも誰とでもすぐ友達になる子が多いのに対し、不得意群では人見知りをする子や友達になるまでに時間がかかる子が多く、親もわが子の友達とのかかわり方への状況を把握していた。幼児期や児童期に多い友人関係の成立の要因には、「相互的接近」、すなわち「住所が近い、いつも遊ぶ、通学路が同じ、席や列順が近いなど」⁽¹⁷⁾があるといわれているが、今回の調査でも遊びの内容や遊び相手が友人関係の成立に関係しているというより、遊び相手の人数や自宅や友達の家という遊び場所が関係していること、すなわち「相互的接近」の機会が恵まれているか否かが影響していた。したがって、幼児期における友達づくりは、子ども同士がかかわる機会を豊かにさせることが、得意、不得意につながると考えられる。

まとめ

K市の2園の幼稚園児488名を対象に、家庭において親から受けるボディコンタクトの豊かさや親のボディコンタクトに対する意識の高さ、子ども同士のあそびの中でのボディコンタクトなどが、他人とのかかわりの典型である友達づくりを巧みにしているとの仮説を立て、家庭における親子間のボディコンタクトや子どもの遊びが、幼稚園での友達とのかかわり、すなわち幼児期の友達づくりに及ぼす影響について検証した結果、次のような結論を得た。

1. 担任が日常の観察から、友達づくりが上手と判定した幼児を得意群、不得手と判定した幼児を不得意群、ふつうと判定した幼児を普通群の3群に分け、家庭におけるボディコンタクトの状況を比較検討した結果、3群間に有意な差は認められなかった。
2. 3群と家庭における子どもの遊び状況を比較検討した結果、よく遊ぶ友達の人数、遊ぶ場所、友達のできやすさの3項目に有意な差が認められた。
3. よく遊ぶ友達の人数は、不得意群は、得意群、普通群に比べて友達の数は少なく、4～5人以上の友達を持っている子は得意群、普通群に比べて圧倒的に少ない。得意群、普通群は園以外でも遊ぶ相手があり、集団で遊ぶ機会があるのに対し、不得意群は1人または全く遊ぶ相手がいない子も多く、園以外の交友関係が乏しく1人ないしは大人としか遊ぶ相手がいない子が多かった。(P < 0.01)

4. 3群とも屋内では自宅と友達の家, 屋外では公園と自宅周辺で多くの幼児が遊んでいるが, 3群間に有意な差が認められた遊び場所は友達の家であり, 得意群, 普通群に比べて, 不得意群は友達の家で遊ぶ幼児が有意に少なかった ($P < 0.05$).

5. 友達のできやすさについては, 不得意群は, 得意群, 普通群に比べて誰とでもすぐ友達になる子は少なく, 人見知りをしたり, 友達になるまでに時間がかかる子が有意に多かった ($P < 0.05$).

今回の調査において, 幼児の友達とのかかわりについては, 家庭における親子間のボディコンタクトの内容やかかわり方とは関連が認められなかった。むしろ3歳までの愛情関係の成立に注目した方が重要であることが示唆された。また, 家庭における子ども同士がかかわる機会が豊かなことが, 友達づくりの得意, 不得意につながった。したがって, 家庭における遊びが, 室外で身体を充分使った運動遊びや社会性を育てる集団遊びが減少した現況においては, このような遊びの機会を体験させ, 社会性や友達とのかかわりを育てる場として, 幼稚園の役割は大きいといえる。

追記

本研究を進めるにあたり, かわいい幼稚園, 第二かわいい幼稚園の先生方, 園児の保護者の皆様方には多大の御協力を頂きましたことを厚く感謝いたします。

引用・参考文献

- (1) 武藤安子 (1993) 発達臨床 人間関係の領域から . 建帛社 : pp.53-60
- (2) クリエイティブプレイ研究会 (1991) 遊びの指導エンサイクロペディア . 同文書院 : p.50
- (3) 野崎康明 (1988) 親の養育態度が子どもに及ぼす影響 . 総合文化研究所 5 : 60
- (4) 新村豊 (1882) 親と子ふれ合いによる人間形成 . 日本YMCA同盟出版 : pp.83-90
- (5) 宮下恭子, 蒲真理子 (2001) 幼児のボディコンタクトを伴う遊びに関する研究 学生のボディコンタクトに関する意識調査を中心として . 東京成徳短期大学紀要34 : 67-78
- (6) 宮下恭子, 蒲真理子 (2002) 幼児のボディコンタクトを伴う遊びに関する研究 親のボディコンタクトに関する意識調査を中心として . 東京成徳短期大学紀要35 : 23-42
- (7) 武藤安子 (1993) 発達臨床 人間関係の領域から . 建帛社 : p.50
- (8) 平井タカネ (2000) リズム運動, ボディワークの精神心理学的研究 リズミカルなボディコンタクトについて 平成9年度~平成11年度科学研究費補助金研究成果報告書
- (9) 辰巳敏夫, 永井千恵子, 西沢幸子, 渡辺真一 (1991) 領域 - 人間関係 . 同文書 : p.28
- (10) 日本保育学会 (1983) 幼児の近所遊びと保育をめぐる問題 (総説) . 幼児の近所遊びと保育 - 保育学年報1983年版 . フレーベル館 : p.11
- (11) ベネッサ教育研究所 (2001) 第2回幼児の生活アンケート調査報告書 . ベネッサコーポレーション
- (12) 吉田伊津美, 杉原隆, 近藤充夫, 森司朗 (2002) 幼児の運動能力の年次推移 . 体育の科学52 (1) : 29-33
- (13) 吉田伊津美, 杉原隆, 近藤充夫, 森司朗 (2002) 幼児の運動能力の年次推移 . 体育の科学52 (1) : 33
- (14) 日本保育学会 (1983) 幼児の近所遊びと保育をめぐる問題 (総説) . 幼児の近所遊びと保育 - 保育学年報1983年版 . フレーベル館 : p.21
- (15) 日本保育学会 (1983) 幼児の近所遊びと保育をめぐる問題 (総説) . 幼児の近所遊びと保育 - 保育学年報1983年版 . フレーベル館 : p.29
- (16) 日本保育学会 (1983) 幼児の近所遊びと保育をめぐる問題 (総説) . 幼児の近所遊びと保育 - 保育学年報1983年版 . フレーベル館 : p.31
- (17) 辰巳敏夫, 永井千恵子, 西沢幸子, 渡辺真一 (1991) 領域 - 人間関係 . 同文書 : p.5